忘れていたことも忘れるまでが思い出

第 16 期　関口 治花

春は怖い。「出会いがあれば別れもある」なんて言葉がふと頭をよぎる。どうやらこの言葉の由来は，「会うは別れの始め」ということわざであるようだ。そのまま解釈すると，「誰かと出会うことは，いつかお別れすることの始まり」という，なんだかとても悲しい話のように聞こえる。でも，このことわざの真意はそういう悲しい話ではない。“誰かと出会ったら必ず別れが来る。だからこそ，その人と出会ったことをかみしめて，大切にしよう”という意味が込められている。

ごくわずかな期間だけ華々しく咲く桜。それをいつか吹き飛ばす雨。季節に例えると春みたいな居場所を私は見つけた。小野ゼミである。自分にはできると思って飛び込んだのに，そこは居心地の良くない居場所だった。じゃあ小野ゼミの楽しいところってなんだろう。来る日も来る日も必ず誰かがいて，いつも誰かしら笑っている。グループ学習室からは東京タワーを独り占めできるし，ロー棟では日替わりカップラーメンだって食べられる。23 時を過ぎてからは夜の構内散歩ツアーに行けるし，裏門をよじ登って警備員さんに怒られたってみんながいるから怖くない。「なんだ，小野ゼミの楽しいところなんてこんなにたくさんあるんじゃん」。楽しいことを見つければ乗り越えられるだろうなんていう安易な気持ちはすぐに崩れていった。入ゼミ試験の後に合格通知をもらったあの瞬間の喜びは，雨で吹き飛ばされた。でも，私には決断できなかったことがひとつある。それは，小野ゼミを辞めるということだった。小野ゼミを最後までやり切るという夢を，夢で終わらせる自分だけは想像したくない。それに，私の目の前には，どんどん前に進んでいく一人一人の皆の姿が映っている。それがまた私にはたまらなくまぶしい。歩みを止めて，歩幅を合わせてまた一緒に歩き出す皆がいる。なんだかんだ楽しそうに皆が今日も笑っている。そんな皆のことも，あの居場所も，絶対に失うもんかと思った。

大学が嫌なら，行かなくてもいい。でも小野ゼミは続けたほうがいい。それは，頭がよくなるからとか，そんな理由からではない。頭なんか悪くてもいいと，思わせてくれるからだ。どんな風になっても，生きていけると教えてくれるからだ。何度だって嫌になればいい。何度だって飽きればいい。でも結局，好きだと再認識すればいい。そう，私は小野ゼミが大好きだ。それでいいじゃないか。私は，過去が輝いているほど，その過去を思い出してしまう。それも思い出さなくていいタイミングで思い出してしまう。だからきっと小野ゼミのことは，なんでもない時に何度だって思い出してしまう。小野ゼミは凄いんだ。ここで過ごした 2 年間は，絶対に誰も忘れないからだ。だから小野ゼミでの 2 年間の思い出は，永久に一生つきまとうのだ。それって最高に幸せなことじゃないか。

家に帰るまでが遠足なら，忘れていたことも忘れるまでが思い出だ。小野ゼミで出会った人とも必ずいつかは別れる時が来る。だからこそ，皆と出会ったことをかみしめて，大切にしたいと本気で思う。これからも，小野ゼミで過ごした日々が，「思い出」にならないように。